

J. ドーフマンの経済学史研究

— 文化過程のなかの経済思想 —

Joseph Dorfman's Studies in the History of Economic Thought; Economic Mind in the Cultural Process

田 中 敏 弘

The purpose of this paper is to review the distinctive features of Joseph Dorfman's studies in the history of economic thought in connection with Wesley C. Mitchell.

Dorfman was a pupil of Mitchell. He expanded and deepened the institutional approach of the history of economic thought as a successor of Mitchell, in his well-known *Economic Mind in American Civilization*, 5 vols.

He tried to apprehend the history of economic thought comprehensively as 'the economic mind in the cultural process'.

For this purpose, he took up not only books, pamphlets and newspapers, but also manuscripts, letters, diaries, sermons and any other materials that he thought it would be useful.

Toshihiro Tanaka

JEL : B31

Keywords : Joseph Dorfman, studies in the history of economic thought, Wesley C. Mitchell, Institutional approach to the history of economic thought.

1. ドーフマンとミッチェル

ミッチェルがコロンビア大学大学院で行なった経済学史講義が、当時コロンビア大学の看板講義となり、全米だけでなく、外国でも注目を集めたのは、その方法論の斬新さと、優れた豊かな歴史感覚と、その理論内容自体によるものであった。ヴェブレンが指摘した経済理論の背後にある「先入観念」(preconception)

を重視し、首尾一貫して、それぞれの経済理論・学説が成立・展開された歴史的状况の認識のうえにたつて、その経済学説を、経済学研究の主体である経済学者の「先入観念」との関連において明らかにしようとしたのであった。

経済理論の単なる自己展開としての、「部分」から「全面」に及ぶいわゆる「一般理論」の展開である「ドグメンゲシヒテ」ではなく、新しい経済学観に基づいて経済学の歴史的展開を示したその斬新さには、当時の多くの若手研究者や大学院生をひきつける大きな魅力があった。

新たな経済学史は新たな経済学を必要とすると共に、新たな経済学は新たな経済学史研究によって生まれ展開されることが示されたと言える。

ドーフマンの経済学史研究は、ミッチェルのそれと同じく、制度主義的方法に基づく経済学史研究をいっそう具体的に深化・拡充することになった。とくに、アメリカでの経済理論・思想の展開に焦点を合せ、開国以来のアメリカ人による経済的思考の歴史的展開を、1930年代の大恐慌とニューディールまで、実証的に描き出すことに成功したのであった。それは、『アメリカ文明における経済的思考』全5巻、2500頁にも及ぶ膨大なもので、しかも豊かな歴史感覚と該博な歴史知識と、綿密な歴史的考証を経たものであった。

こうした制度主義経済学の立場を異端として退ける正統派経済学者や学史家たちは、これに匹敵したアメリカ経済思想史をもって応えることが絶望的であるため、彼らはドーフマンの学史研究とその意義についてほぼ沈黙するほかなかったと言える。

ドーフマンのアメリカ経済思想史は、ほとんどどの点を取っても、賛否両論に分れる可能性の大きい問題を取扱っており、批判や反論は十分予想しうところであった。実際に、1980年代になれば、部分的な批判やコメントは徐々に現れるようになった。しかし、全体としてのドーフマンのアメリカ経済思想史に取って代るものを提供しようと試みることはまず不可能であった。

ミッチェルとドーフマンとの出会いは、ドーフマンがリード大学でエアーズの影響を受けたのち、コロンビア大学の大学院に進み、指導教授ミッチェルの指導を受けたことに始まる。ドーフマンはまたジョン・モーリス・クラークの指導も受けながら、1935年にPh.Dを得ている。その博士論文が、前年に出

版された『ソースタイン・ヴェブレンとそのアメリカ』（*Thorstein Veblen and His America*. New York, Viking, 1934. English edition, London, Gollencz, 1935.）であり、ヴェブレン研究の古典的名著となったものである¹⁾。

この論文は経済学の最優秀博士論文に選ばれ、コロンビア大学から第1回のセクグマン賞を受賞している。

ミッチェルとの関係で、ドーフマンは1929年から31年まで、New School for Social Researchの研究員となった。そして1931年にはコロンビア大学政治科学大学院のスタッフとなり、1948年に同大学院の正教授となっている。そして何よりも、ドーフマンの主著『アメリカ文明における経済的思考』（*The Economic Mind in American Civilization, 1606-1933*. 5vols, 1946-1959, New York: The Viking Press.）（以下EMACと略す）は、ヴェブレンとその後継者、ミッチェルに献げられたのであった²⁾。

2. ドーフマンの生涯

ドーフマンは1904年3月27日、ロシアのラモノスカ（Ramonovska）に生れ、1905年1月にアメリカに入り、合衆国市民権を得ている。オレゴン州

1) 八木甫訳『ヴェブレン その人と時代』（ホルト・サウンダース・ジャパン、1985年）

2) 筆者は、ドーフマンとその経済学史研究について、これまで、しばしば述べることがあった。それらは以下の通りであるので参照されたい。

1. 「アメリカでの経済学史研究について」（1962年）（『アダム・スミスの周辺—経済思想史研究余滴』、日本経済評論社、1985年収録）
2. 「経済学史家としてのJ. ドーフマン」（社会経済思想史「共同研究」会編『制度・市場の展望』1992年6月）
3. “Joseph Dorfman and the Studies in the History of American Economic Thought in Japan”, *Kwansei Gakuin University Annual Studies*, vol. XLII, 1993.
4. 「経済学史家としてのジョージ・ドーフマン（1904-1991）」（関西学院大学『経済学論究』、第47巻、第1号、1993年4月）
5. 「経済学史研究と私—学問・思想・キリスト教—」（同上、第53巻、第2号、1999年7月）
6. 「制度主義にもとづく経済学史：文化過程のなかの経済思想」（同上、第57巻、第3号、2003年12月。のち、田中敏弘『経済学史研究と私』、関西学院大学出版会、2008年に収録。）

のポートランドで、公立の小学校・中学校・高等学校に学び、1924年に同地のリード大学 (Reed College) を卒業。翌年同大学から修士号を得ている。リード大学では制度学派のエアーズ (Clarence Edwin Ayres, 1891-1972) に師事し、初めて制度学派に導かれることになった。

リード大学を離れてのち、ドーフマンはコロンビア大学大学院に学び、主としてミッチェルの指導を受けることとなり、同時にジョン・モーリス・クラーク (Johon Maurice Clark) の指導も受け、1935年に、前年に出版された有名な *Veblen* によって博士号を受けた。

ドーフマンは1971年に退職し、名誉教授となるまで40年にわたり研究と教育につとめた。

1945年にアメリカ経済思想史研究のため、ロックフェラー財団から2ヶ年間の研究補助金を受けている。さらに、1953-54年には、有名なグッゲンハイム研究員となり、1959-60年には、フォード財団の Faculty Research Fellow となっている。また、学会関係では、1960-61年に経済史学会副会長となり、1969年には、進化論的経済学会会長、1970年には、レニングラードで開催された経済史家国際会議において経済思想史部門の書記 (実質上の座長) を務めている。その他、アメリカ経済学会関係では、歴史部門の advisory committee (1960-71[?]) や、職業倫理委員会 (1959-62年) 委員にもなっている。

さらに編集関係では、ハミルトン・ペーパーズの編集委員 (1955年～) をはじめ、*History of Political Economy*, *Political Science Quarterly*, *Journal of Economic Issues* の編集顧問としても活躍した。

1971年以後で特記すべきこととして、2つの賞の受賞がある。第1は、1975年に進化論的経済学会から「ヴェブレンーコモنز賞」であり、第2は、1982年5月に経済学史学会 (History of Economics Society) から「特別優秀会員」として表彰されたことである。

3. ドーフマンの経済学史研究

「ヴェブレンーコモنز賞」の受賞に際して、ドーフマンの経済学史の特徴とその学問的貢献について、W. J. サムエルズ (Samuels) は、深い理解と共感

と高い評価を示す一文を *Journal of Economic Issues* に寄せたのであった。

サムエルズによれば、「ジョージフ・ドーフマンは、制度派経済学の形成にあずかった諸貢献の最初の解説者であったと同時に、もっと広大なアメリカ経済思想の発展の最初の歴史家であり、解説者であった。」彼のヴェブレン研究、『ソースタイン・ヴェブレンとそのアメリカ』(*Thorstein Veblen and His America*, New York: Viking, 1934) と *EMAC* 5 巻は、まさに「永久不滅の知性史研究」であった。とくにサムエルズが強調したように、ドーフマンの理解によれば、経済学説は学界内部で純粹に発展するものではないのであり、この認識こそは経済学史に対する正真正銘のおそらくまったく独創的な貢献であった。」

さらに、サムエルズは、適確にも「ドーフマンにとって経済学史は制度派経済学の実践であった」と明言している。「彼によるアメリカ経済学史の解釈は、非常に深い意味において、まさに制度派経済学に対する彼のアプローチについて述べたものなのである。この点においてこそ、われわれは彼の学恩を受けているのだ。³⁾」これがサムエルズの締めくくりの言葉であった。

第2の「特別優秀会員賞」は、アメリカの経済学史学会が、経済学史研究において、とくに卓越した業績をあげた学者を表彰するために1980年に創設されたものであり、その第3回がドーフマンとフェッター (Frank W. Fetter) に与えられたのであった⁴⁾。

ドーフマンはこの賞を受けたとき、既に病状が進み、残念ながら出席することがかなわなかったのであるが、その授賞理由として以下の2点が挙げられた。

まず第1は、言うまでもなく、*EMAC* である。この総計2542頁に及ぶ大著について、学会は、まずその範囲が極めて包括的で広く、詳細を極めてい

3) W. J. Samuels, 'The Veblen-Commons Award, Joseph Dorfman', *Journal of Economic Issues*, vol. IX, no. 2, June 1975, p. 143.

4) ちなみに挙げれば、第1回はジャッフェ (William Jaffé)、第2回はスペングラー (Joseph J. Spengler) に与えられている。その後の受賞者は、スティグラー (George Stigler)、ロビンズ郷 (Lord Robbins)、ハチスン (Terrence W. Hutchison)、シャックル (G. L. S. Shackle)、ハイエク (Friedrich A. von Hayek)、ブラック (R. D. Collison Black)、ブラウグ (Mark Blaug)、パティンキン (Don Patirkin) 等々となっている。

こと、そこで発見された事実・思想が実に正確に展開されていること、さらに、このために著者は単に主著だけでなく、書簡、手稿、片面刷り 1 枚ものの印刷物、新聞、パンフレット、説教、およびその他、秘伝的な著作までも、可能な限りの資料を徹底的に探究して書いている点を明確に指摘している。

このようにして、EMAC は、人そのものの歴史—伝記的研究—と、思想的な研究と、歴史自体—ヒストリカル・イヴェンツそのもの—の研究とを合体させており、まさにアメリカ文明における経済的思考の流れを、そういう広がりのもとで展開したものである。

授賞理由の第 2 は、もちろん、彼の制度派経済学の研究たる *Veblen* を初めとする、ヴェブレン、コモنز、ミッチェル、その他の制度派経済学者に関する卓越した研究が挙げられている⁵⁾。

ドーフマンは 1963 年には、エアーズ、チェンバレン (N. W. Chamberlain)、クズネッツ (Simon Kuznets)、ゴードン (R. A. Gordon) との共著、*Institutional Economics: Veblen, Commons, and Mitchell Reconsidered* (Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1963.) を出している。これはヴェブレン、コモنز、ミッチェルに関する研究論文を編集したものであり、これによって、ヴェブレン—コモنز—ミッチェルという形で、制度学派経済学の中核の研究が確立したと言ってさしつかえない。

ドーフマンは 1991 年 7 月 21 日に 87 歳で他界したが、翌年 5 月 30 日から 6 月 2 日にわたって開催されたアメリカの経済学史学会大会 (History of Economics Society 19th Annual Meeting) において、彼を記念するパネル・ディスカッション、Remembering Joseph Dorfman (1904-1991) が行われた。こうした個人名を冠したパネルは、アメリカの経済学史学会が 1973 年に創設されて以来、初めての特別企画であった。このことは、アメリカにおける経済学史家としてのドーフマンの重要性を改めて示すものであった。

それは、司会者 2 名と報告者 7 名、計 9 名によって行われた。司会者は Laurence Shute と Solidelle Fortia Wasser、報告者はコーツ (A. W. Coats)、

5) Cf. *The History of Economics Society Bulletin*, vol.IV, Issue 1, Spring 1982. p.5.

グッドウィン (Craufurd D. Goodwin)、ハーシュ (Abraham Hirsch)、ロスバード (Murray N. Rothbard)、サムエルズ (Warren Samuels)、ウェッジウッド (Ruth Wedgwood) と筆者であった。

パネラーたちは、それぞれドーフマンとの個人的な関係に簡単にふれたあと、ドーフマンの学問的業績の特徴について述べたのであった⁶⁾。

4. ドーフマン経済学史の基本的特徴

そこで、それらを参考にし、ドーフマンによる経済学史研究の最も重要な特徴について簡潔に指摘しておきたい。

まず第1に、ドーフマンによる学史研究は、単に印刷された著作だけでなく、マニュスクリプトを中心に、さまざまな資料を利用可能な限り、どこまでも探索し、それらを縦横に利用している点である。彼の場合はこれが並はずれて徹底していることである。

第2には、研究上の視野の広さと言える。これは明らかに制度学派の経済学観に基づくものと言える。経済理論史を軽視せず、それを超えて広く経済思想史的方法と経済政策史的観点、さらに伝記的な優れた観点を総合することによって、アメリカ文明における経済的思考の歴史的展開が描き出されている。

とくに、サムエルズによれば、ドーフマンは、制度派経済学の形成にあずかった諸貢献についての最初の歴史家であり、解説者であった⁷⁾。

さらに、サムエルズは適確にも、「ドーフマンにとって経済学史は制度派経済学の実践であった⁸⁾」とも言っている。

また、特別優秀会員として表彰を受けた際には、授賞理由として次の2点が挙げられている。

第1は、言うまでもなく *EMAC* である。この大著は、周知のように、5巻本の膨大なものである。この著作について、学会は、その対象範囲が包括的で広大なこと、詳細を極めていること、さらに、主著だけでなく、書簡、手稿、片

6) 筆者が行なった報告は、さきに挙げた筆者のドーフマン関連論文の3となった。

7) Warren J. Samuels, 'The Veblen-Commons Award. Joseph Dorfman', op.cit. p.143.

8) *Ibid.*, p.144.

面刷り 1 枚もの印刷物、新聞、パンフレット、説教、およびその他、秘伝的な著作までも、可能な限りの資料を徹底的に探求している点を再確認している。

さきに述べた記念特別パネルで、グッドウィンによって述べられたように、「アメリカでは、ドーフマン以前には、非常にアカデミックな意味での経済学史研究は、本来存在しなかった。ドーフマンこそは、まさに本来の意味での専門的な経済学史をアメリカで初めて打ち立てたのであった。それまでは、いわばホビーとして書き散らしていたに過ぎない。専門の学史研究者として、フルタイムを学史に投じたのは、ドーフマンが最初であった⁹⁾。」

第 3 には、EMAC にしても、Veblen にしても、それらは直接的にはアメリカ経済思想史研究だが、そこに示されている学史の方法はアメリカに限定されるものではなく、ヨーロッパの学史研究にも適用されうるものである。この意味では、ドーフマンの経済学史は経済学史の古典の 1 つと言ってよいであろう。

第 4 には、とくにドーフマンが最後まで探究して止まなかったヴェブレン研究は、優れた伝記的研究の典型をなすと言える。伝記的アプローチをフルに活用しつつ、ヴェブレンの全体的思想に迫ろうとする経済学史家ドーフマンはとくに注目に値する。

以上、4 点のような特徴をもつドーフマンの経済学史研究は、ミッチェルに従い、それをさらに大きく発展させることとなった。それは基本的に制度派経済学の方法論に基づくものであり、経済学に隣接する社会科学全般の業績を可能な限り取入れ、その進化論的展開過程を全体的に追求しようとしたものである。とくに、ヴェブレンから出発して、コモنز、とくに優れてミッチェル、その他の制度派経済学者について行った制度派研究は、単に制度学派の学史研究にとどまらず、制度派経済学自体の展開に寄与するところ大であった。彼が進化論的経済学会の会長に選ばれたことが、このことをよく物語っていると思われる。

ドーフマンの言う「文化過程のなかの経済思想」(The economic mind in

9) これは、Remenbering J. Dorfman, 1992 年での発言である。

the cultural process) という言葉によって最もよく表されている視点を根底にもつ経済思想の歴史的展開の把握が、彼の学史研究の根幹をなすと言える。

ドーフマンの経済学史研究の特徴をこのようにみえてくると、それは、彼の *EMAC* 第 1 巻の序文冒頭の次の言葉によってさらによく確認することができる。

「アメリカでは、他の国と同様に、経済学説は文化の本質をなす一部分である。その豊富さとその関連する範囲とは、それらの実際的な事柄と知的努力との自然の産物のなかで取扱われるときにのみ十分理解し得る。経済学説は他の種類の学問や思索との不断の異種交配によって発展する。最終的な分析では、人間の精神はその行動のうちに最も明確に読み取ることができるゆえ、経済学説の形成者たちの実践的野心と政治的関心は、あいつぐ世代の人々が公けに記録してきたものを理解しようとする人々によって絶えず念頭に置かれねばならない¹⁰⁾。」

こうしたユニークな総合的方法によって、アメリカ社会という 1 つの文化過程のなかでの経済思想の展開を扱ったアメリカ経済思想史は、ドーフマンを措いて他に書くことは出来なかったと言える。

以上から明らかなように、ミッチェルの経済学史研究は、その弟子のドーフマンによって継承・展開され、制度主義に基づく経済学史研究として大きく展開されたと言える。ミッチェルによる経済学史の主著『経済理論の諸類型』は、弟子のドーフマンによって引き継がれ、*EMAC* として結実したのであった。

むすびにかえて

以上において、ミッチェルとドーフマンの経済学史研究を全体として取上げ、その重要と思われる特徴を明らかにしようとした。それによって言えることは、ミッチェルによって制度主義的経済学史研究が切り開かれたこと、そして、それはその弟子であるドーフマンによって継承・展開されて、アメリカにおける制度主義に基づく経済学史研究が、とくにアメリカ経済思想史において

10) J. Dorfman, *EMAC*, vol.1, 1946, p.ix.

だが、確立されたということである。これによって、ミッチェルがアメリカにおいて果した経済学史研究の位置がはじめて明らかになったと思われる。